

日本人と博物学

尾本恵市

おもと けいいち / 1933年東京生まれ。東京大学および国際日本文化研究センター名誉教授。総合研究大学院大学・葉山高等研究センター・シニア上級研究員。専門は分子人類学、アイヌおよびフィリッピン先住民ネグリの遺伝的起源を解明した。著書『分子人類学と日本人の起源』（裳華房）、『ヒトはいかにして生まれたか』（岩波書店）など。

人類学者としてのわたしの原点は、昆虫少年だった子どものころにさかのぼる。物心ついたころ、土堀にまわって羽を開閉していた蝶の美しさに見とれ、父が買ってくれた図鑑でルリタテハという種類と知った。小学校でのあだ名は昆虫博士で、中学、高校でも蝶集めに没頭し、いずれ生物学者になってダーウィンのように進化を研究し、またヒマラヤの奥地で新種の蝶を発見することを夢見ていた。大学で人類学を専攻するようになってからも、蝶の蒐集・研究は趣味として続け、前述の夢もほぼ果たすことができた。

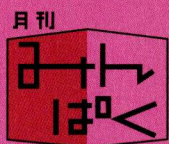
ところで、世界で昆虫少年がいちばん多い国は日本ではなからうか。昨今は蝶よりクワガタムシなどに人気があるようだが、専門業者が主催する昆虫販売会で小・中学生など若年の客が多いのに驚かされる。一方、歴史的に博物学の本場といわれる欧米では、蒐集家はほとんど中・高年者で、日本のように大勢の昆虫少年がいるとは思えない。図鑑類や同好会の数とレベルでも、日本は世界で抜き出ている。これは何故であろうか。

じつは、日本には江戸のむかしから博物愛好家が多かった。そのルーツは中国の本草学、つまり薬用植物の知識であったが、日本ではそれが独自の発展をとげ、対象は必ずしも人間の役に立つ動植物に限らず、むしろ

忠実な自然描写と芸術的な美を重視する独特の博物学になった。一例をあげれば、中国には多数の蝶を描く「百蝶図」があるが、どの蝶も幻想的で写実性がない。それに対し、丸山応挙の百蝶図（一七七五年）では、個々の蝶を現在の種として同定できるほど写実的で、かつ全体の構図が美しい。

最近、酒田市立図書館の光丘文庫で松森胤保の『両羽博物図譜』を見る機会をえた。鳥獣、魚介、昆虫を網羅する自筆彩色画の膨大な量と正確な描写にまず圧倒されるいのちのあつら磯野直秀氏の解説で作者の人となりを知って驚嘆した。彼は、庄内藩の武士で、後に家老、明治維新後は政治家として活躍したが、少年時代からの趣味の博物学でも、対象の広さ、精確な記録と写実画で卓越していたうえ、独自の自然哲学を発展させた。六〇歳近くになって採集したオオムラサキ雌雄の図は、すばらしい出来栄だが、そこに記された採集の苦心談を読むと、まさに老昆虫少年の面目躍如である。

日本人に昆虫少年が多い理由は、江戸時代の博物学の伝統が現代に引き継がれているからかもしれない。博物学は、子どもの自然への好奇心から発展するもので、自然を愛する原点となる。近代生物学の名のもとに、この感性を阻害するようなことがあつてはならない。



目次

JULY 2007 7
月刊みんぱく

01 エッセイ 世界へ世界から
日本人と博物学
尾本 恵市

02 特集 化粧

現代化粧文化事情
玉置 育子

これからは「スロービューティー」
石田 かおり

社会現象としての中国の化粧
韓 敏

舞台上化粧をする芝居

鶴岡 正樹

ピンディで「女」になる

松尾 瑞穂

白化粧の「新成人」

石田 慎一郎

08 モノ・グラフ
綿入れ文化

高橋 晴子

10 地球ミュージアム紀行
古城と河と博物館と

佐々木 利和

11 表紙モノ語り

盤上遊戯を楽しむ首長たち

阿久津 昌三

12 みんなで共有

万国津々蒲々

14 みんなで共有

福井 栄二郎

15 時論・新論・理想論
アイヌ文化と学校教育、そして博物館

加藤 謙一

16 外国人として生きる
先住民アボリジニと共に、
赤土の大地に暮らす

黒田 智子

18 地球を集める
ギターに刻まれた歴史

笹原 亮二

20 生きもの博物誌
サバクバッタの異常発生

石本 雄大

22 フィールドで考える
水浴びの作法

飯岡 有佳子

24 開館30周年記念事業のご案内

次号予告・編集後記